

第 1 回酒田市総合計画審議会議事概要

1. 日時

令和 8 年 7 月 30 日（木）10 時～12 時

2. 場所

酒田市役所 3 階 第 1 委員会室

3. 出席者（委員 15 名 ※1 名欠席）

東北公益文科大学学生サークル (Start-Up&Creation)	部長	五十嵐 舞衣
酒田市袖浦農業協同組合	理事	五十嵐 真理
酒田市法人保育園・認定こども園協議会	会長	池田 祐子
酒田市自治会連合会連絡協議会	会長	小野 英男
東北公益文科大学	学長	神田 直弥
酒田市社会福祉協議会	会長	菊池 裕基
日向コミュニティ振興会	事務局長	工藤 志保
酒田市スポーツ推進審議会	委員	佐藤 寿実子
酒田ふれあい商工会	副会長	佐藤 達也
東北公益文科大学 地域共創センター	地域連携部会長	澤邊 みさ子
酒田商工会議所	副会頭	菅原 靖
庄内みどり農業協同組合	理事	高橋 身依
酒田観光物産協会	会長	西村 修
庄内で暮らそう！移住者交流会	会長	山脇 文子
酒田市芸術文化協会	副会長	渡部 美恵子

【事務局】

市長、総務部長、企画部長、地域創生部長（代理出席：商工港湾課長）、市民部長、健康福祉部長、医療介護連携調整監、建設部長、農林水産部長（代理出席：農政課長）、危機管理監、教育次長、企画調整課長、企画調整課職員

4. 議事内容

○委嘱状交付

○市長あいさつ

- ・いつもそれぞれの分野でお世話になっている方ばかりである。この度も総合計画の審議会委員をお引き受けいただきありがたい。今年度、策定を進めている他の個別計画もあるため、それらについても総合計画の策定と連携して進めていきたい。
- ・また、総合計画は様々な個別計画の一番上、あるいは一番中心の計画である。酒田の場合は計画の期間を 10 年間としており、現行の計画があと 2 年弱で期間満了になるため、令和 10 年度からの発効を目指して、皆様に審議をお願いすることになる。
- ・総合計画は市町村の一番中心的な計画であるものの、法律上は策定義務がない。そのため、作る、作らないは市町村の判断するところとなる。
- ・それでも、なぜ作るのかといえ、やはり皆さんと一緒に酒田の今後の方向性を共有していくことが大事だと思っているからだ。
- ・とにかく、酒田をより良いまちにしていきたいという気持ちは全員に共通していると考え。また、当然のことながらまちづくりは酒田市役所の職員だけで進めるわけではなく、むしろ、本日お集まり頂いた民間団体の方々がそれぞれの分野でより良い酒田を作るために行動している。
- ・そういった方たちと方向性を共有し、今後の 10 年もそれに向かってそれぞれやるべきことをやっていけば、おのずと良いまちになっていくと思う。
- ・なお、審議会委員の数は、今回少なめにした。前は 25 人だったが今回は 16 人になった。その代わりにワークショップや市民アンケート調査に、デジタル的な手法を取り入れて、市民から広く意見を募る。
- ・「さかポス」という市民から意見を集めるプラットフォームを運用している。そういった仕組みを使って、様々な方の意見を聞きながら考えを共有していきたい。
- ・私自身の考えは、最後に述べるが、基本的な考え方として、10 年後の酒田市の将来像は誰が市長になっても大きく変わるものではない。
- ・本日、中心적으로ご説明させていただくのは、「酒田市の現状をデータで見る」というものだが、現状をしっかりと共有すれば、どのような形でまちを作っていくべきかについては、おおよその方向性は同じになると思う。その手段についてはいろいろと意見があると思うが、データや現実にはしっかり根付いた方向性を皆さんと一緒に共有していければ嬉しい。
- ・方々の意見を今日お聞きできるのを大変楽しみにしている。

○委員紹介

〈出席委員より自己紹介〉

○会長及び副会長の選出

(事務局)

- ・酒田市総合計画審議会条例第5条第2項の規定により、委員の互選により定められている。立候補、推薦があればお願いしたい。

《委員より発言なし》

(事務局)

- ・特にないようなので、事務局より推薦してもよいか。

《異議なしの声》

(事務局)

- ・事務局案としては、会長は神田直弥委員、副会長は菅原靖委員にお願いしたい。

《異議なしの声》

○会長及び副会長あいさつ

(会長：神田直弥委員（東北公益文科大学学長）)

- ・この度、酒田市総合計画審議会の会長という大変重要な役割を務めさせていただくことになり、大変身の引き締まる思いである。
- ・酒田市を取り巻く現状、つまりは人口減少や少子高齢化、また経済の状況などを鑑みると、非常に大変な時期を迎えているという認識をしている。
- ・その一方で、酒田市には豊かな歴史や文化そして自然、この地域を支える多くの人材がいる、ということが重要である。
- ・総合計画は行政だけで作成をするものでなく、市民や企業、各種団体、教育機関など、この地域で活躍する様々な方々が共通して、この酒田をどうしていくのか、どうしていきたいのか、という未来像、つまり目指す方向性を共有し、その方向に向けて協働して取り組んでいくための大きな指針であると考えている。
- ・本学もこの4月から公立化をしたわけだが、地域に根ざした大学として、学生たちも教員も地域をフィールドとした教育研究活動に取り組んでいる。
- ・公立化を迎えた今、これまで以上に地域の皆様と連携し、地域の未来を担う人材の育成や地域課題の解決に貢献をしていきたいと考えている。
- ・本審議会では、委員の皆様からそれぞれのお立場やご経験に基づいた貴重なご意見をいただきながら、将来の酒田市がどのような立ち位置を目指すべきか、また、その実現に

向けて何が必要なのか、ということについて議論をしてみたい。微力ではあるが、委員の方々のご協力をいただきながら、実りある審議となりますよう努めてまいります。

(副会長：菅原靖委員（酒田商工会議所副会頭）)

- ・この度は副会長という役職を授かり、大変緊張している。会長を補佐しながら、有意義な審議会になるよう、微力ではあるが務めてみたい。

(事務局)

- ・ここからは、酒田市総合計画審議会条例第6条第1項の規定により、神田会長に議長をお願いしたい。

○総合計画審議会

1 開会

2 諮問

〈市長より諮問書を会長に渡す〉

3 協議

〈事務局より資料1～3に沿って説明。質疑応答なし。〉

(会長：神田直弥委員（東北公益文科大学学長）)

- ・協議事項について、委員の皆様全員からご意見を頂戴したい。

(委員)

- ・私が部長を務めている学生サークル「Start-Up&Creation」では、企業、まちづくり、商品化の3つのチームで、それぞれが地元企業と連携しながらプロジェクトを実施している。大変緊張しているが、審議会では、若者視点、学生視点、あとはプロジェクトの実施を通じての視点からお話させていただきたい。
- ・私は、酒田を都市部にはない豊かな暮らしと人の温かさがあり、離れても帰りたくなるまちにしていきたいと考えている。
- ・特にリターンの方に注目している。一度、都市部に出た方の多くは都会の利便性に惹かれる一方で、地元ならではの食の美味しさ、自然環境、人の温かい繋がりに気づくと思う。
- ・10年後、豊かな食、自然、人の温かさという強みをベースに、若者や地域の方が緩やかに繋がれる、コミュニティや交流拠点がより充実したまちを目指したいと思っている。
- ・また、一時的にまちを離れても、SNSやオンラインの取組を通じて、常に地元と関わり続けられる関係人口の仕組みを整えることで、ライフステージが変わったときに、やは

り酒田で暮らしたいと自然に思えるような、心理的安全性の高いまちづくりをしたいと考えている。

(委員)

- ・私が農業を営んでいる袖浦地区は園芸地帯であり、メロン、果樹、あとは花で生計を立てている方が多い。
- ・当農協でも 10 年後のあり方を常に頭に置きながらいろいろな取組をしているが、特に力を入れているのが新規就農支援である。
- ・どうしても農業というのは難しい職業で、就農した方でも途中で挫折してしまう方が少なくない。
- ・本当に農業だけで生計を立てていこうとすると、技術的な部分も含めていろんな支援が必要になる。
- ・当農協では新規就農者のリストアップをし、営農指導員が中心となり常に細かい指導に取り組むなど、自立支援に力を入れている。
- ・また、最近困っているのが人手不足である。家族農業だけではやっていけないところが多く、どうしてもパートさんや、お手伝いをしてくれる方がいないと、経営規模の拡大は難しい。
- ・例えば会社をリタイアして時間に余裕がある方がいたら、すぐにその人を確保できる人材バンクのような仕組みがあると良い。

(委員)

- ・事務局の説明にもあったとおり、少子化が進んでおり定員を減らす保育園が増えている。また、子どもたちが主体的に学ぶ・遊ぶ保育を進めている。
- ・うちの保育園にも年長児が 19 人いるが、毎年 10 校ぐらいに分かれて就学する。個性を重んじて保育をしているが、それぞれの園の学び方の違いもあるのか、小学校に上がったときにつまずいてしまうお子さんもいると聞く。就学時の連携に課題があると感じている。
- ・そんな中で昨年、福島県の大熊町にある、0 歳児から 15 歳までが一緒に学び、遊ぶ「学び舎ゆめの森」を視察した。そこでは、大きな図書館を真ん中に置いて、中学生までの子どもたちがともに遊び、学び、関わる場所を見てきた。これが本当にシームレスな教育保育になるのではないかと思った。
- ・少子化ということで、小学校も減り、保育園も減ることになるが、保育園だとそもそも学区がないので、いろんな地域から入園をしてくる。一方で、小学校に進学したときには学区という考え方が出てくるので、教育委員会でも策を講じているかと思うが、今後は少子化だからこそ取り組める方法が求められるのかなと感じた。
- ・2028 年に保育指針、それから教育要領、保育要領が改訂されるところで、シームレスな教育保育が今後のキーワードになると考えている。

(委員)

- ・自治会を代表してきているので、自治会の中での話題や自治会での活動に関する話しかできない。例えばゴミ収集の問題だとか、子どもたちの学校への送迎だとか、日々そういう話題の中にいるので、その延長線上でお話させていただく。
- ・まず、当然のことながら少子高齢化が大変で、それでも残った人間でできる範囲のことをやっている。
- ・どこでも、どの団体でも同じことだが、100%ハッピーな話題にはならない。けれども、ご高齢の人、あるいは障がい者でも良いのだが、その人1人1人にスポットライトを当てて喋ってもらおうとかして、少しでもその場がハッピーになればよいのではないか、という方向性で進んできた。
- ・数字をみて、どうのこうのと喋ることはできないが、地域に密着した自治会の活動は、我々だけではできない。行政の方と相談しながら、意見を聞きながら進んできたことに、自治会連合会として手応えを感じている。

(委員)

- ・ただ今、事務局から酒田市の現状データの説明があった。
- ・今朝の新聞でも、全国の人口が1億2000万人を割ったというニュースがあった。去年と比べると56万人ほど減ったということで、酒田のデータを見ても、全国の傾向をそのとおり反映していると感じた。
- ・そういった中で、やはり高齢者の方、特に単身の高齢者のみ世帯というのが今後ますます増えてくる。そこで、今言われているのが、頼れる身寄りのない高齢者の方への支援である。
- ・周りに家族もいない、親戚もいないという中で、その方の生活支援をどうしていくか、金銭管理だとか、あるいは入院入所するときの支援だとかをどうするか。ということが重要になる。
- ・あるいは、その方が亡くなったときに、葬儀を誰がやるのか、死後の事務を誰がするのかということが話題になっていて、今後大きく話題になってくると思っている。
- ・先ほど個別計画の話があったが、今年、酒田市では地域福祉計画を策定すると聞いている。併せて、我々、社会福祉協議会でも地域福祉の活動計画をつくる。
- ・ぜひこの総合計画の中でも、そういった福祉の面、特に包括的に死後の事務などに対して支援をしていくことを考えていきたい。
- ・高齢者に限らず「8050」だとか、引きこもりだとか、ゴミ屋敷の問題だとか、家庭でもいろんな問題を複数抱えている場合もあるので、各団体、力を合わせてやっていかなければならない。

(委員)

- ・当振興会では、活動を三つの柱に区分して取り組みを行っている。その三つの柱というのは「人づくり」「場づくり」それから地域にお金を落とす「仕組みづくり」である。

- ・ 支え合いの活動を役員主体ではなくて「みんなで」をキーワードに、顔の見える関係作りを重視して事業を展開してきた。70 歳まで働くことも珍しくない時代となり、地域との関わりを負担に思う人が増えてきた。20 年間、地域コミュニティに携わる中で、人の繋がりが希薄になってきた、他人事になってきた、と感じる場面が増えて残念に思っている。
- ・ だからこそ、1 人 1 人がこの地域や社会に対して何をできるかということを考えながら支え合うことが、これまで以上に必要なんじゃないか、と強く感じている。
- ・ 日向コミュニティ振興会は様々な団体から、共創地域づくりの関係で支援を受けているが、先日も東北公益文科大学の学生から「場づくり」の一環で、にっこりランド夏祭りを企画していただいた。イベントを始めてから 4 年ぐらいになるが、高齢化率 56%の地区にたくさんの子どもの家族が集まる姿がまちを元気にしてくれる。
- ・ また、元気にしてくれるだけでなく、住み続けたい、子育てしたい、帰ってきたいと思えるまち作りに繋がるのではないかと感じている。
- ・ そして、自然災害が激甚化している。防災、減災の取組を一層深めるとともに高齢者や避難に支援が必要な方を地域全体で見守り、そして支えあえる仕組み作りにも力を入れていきたい。
- ・ 10 年後の酒田はデジタル技術を活用しながらも、人と人との繋がりを大切にし、豊かな自然や景観を未来へ受け継ぎ、誰もが安心して暮らし続けられるまちであってほしい。また、そのような酒田市を市民、地域、大学、地域外の方々、みんなでつくっていったら良いと思っている。

(委員)

- ・ 出身は鹿児島だが、2015 年にアランマーレ山形のバレーボールチームが発足する際に酒田に移住した。それから 11 年が経つ。
- ・ 選手をしていたこともあって、今は中学生女子のバレーボール指導にあたっている。私自身も移住し、結婚し、今は 3 歳と 1 歳の子どもがいる。生活していてすごく素敵なまちで、私にとって酒田は第二の故郷だ。
- ・ だからこそ、今日こうやってデータを詳しく見て、こんなに課題があるのだな、将来、子どもたちどうなるのかな、という気持ちを持った。
- ・ 一方で、ことスポーツに関しては、スポーツが皆さんのコミュニティの中心になったり、スポーツが皆さんを元気にしたり、ハッピーにしたりといったことができたかなと思っている。様々な分野の方々と一緒にコラボレーションしながら、たくさんの子どもたちにとって魅力のあるまちにできるよう、今後の計画策定に関わっていきたい。

(委員)

- ・ 酒田ふれあい商工会は旧八幡町、旧平田町、旧松山町の商工会が合併して成立した組織だ。酒田市の課題と同じで、会員数が減少している。
- ・ 会員となっている会社の多くは山間部、中山間部に位置している。その中でも頑張って

いる企業は数多くあるので、そういったところへの金融支援、スタートアップ支援と事業承継支援、加えてサンロクとタイアップした支援に取り組んでいる。

- ・また、私の会社は建設業の中の管工事、設備工事をしている会社だが、管工事組合にも所属していて、そちらでも廃業する会社がここ数年ですごく増えてきた。
- ・そんな中で、社会資本の下支えをする企業として、10年後も継続して営業できるように会社としても努力している。
- ・外国人労働者に頼らざるを得ないような状況にもなってきているので、そういったところも酒田市の課題として取り上げてほしい。
- ・加えて、東北公益文科大学にたくさんの学生さんが集まり、酒田の人口減少が少しでも防げればと期待している。

(委員)

- ・地域共創センターは大学と地域を繋ぐ窓口として20年前の2006年に発足した。公益大は公立化する前から地域の方々からの支援を受けてできた大学なので、その役割を果たすために設置された組織である。
- ・私自身は社会福祉を専門としており、インターンシップ等も担当している。
- ・小学校とも様々な関係でお付き合いをしているが、先ほど委員より小学校に進学するタイミングでつまづいてしまう学生がいる、というお話をいただいた。
- ・酒田の小学校には様々なカリキュラムがあり、その過程で酒田の魅力に気づき、酒田が好きだという感情が芽生える。反対に、大人になるにつれて現実が見えてくることもある。
- ・先ほどの説明の中で課題がたくさん上がっていたが、酒田のことをネガティブに捉える子どもたちが少しずつ増えるとするとうそく残念だ。
- ・私も酒田に来て長くなるが、外から来た人間なので酒田の魅力はよく伝わってくる。
- ・10年後とは言わないが、酒田が好きだと思う人たちが増えてほしいと思っている。そのために何をするのかというのはこれからだと思う。もちろん、何か大きな産業を一つ立ち上げることも考えられるが、高齢者も子どもも外国人の方も繋がれる仕組みを作りたい。それが、いわゆる「居場所」になると考える。
- ・現役世代はなかなか時間を取ることができないと思うが、学生も含めて、そういったところで繋がることのできる仕掛けを考えていきたい。
- ・また、それを支えていくものとして、公共交通はとても大切だと考えている。先ほどインターンシップの話もさせていただいたが、若い学生を見ると、この地域にどんな仕事があってどんなふうになら動いているか、ということを理解していない。
- ・だからこと、知らないものを知る機会としてインターンシップがあると思うが、車を持たない学生は、遠いところまで移動してインターンシップに参加することができない。
- ・つつい行けるところを選んでしまうと、とてももったいない。そういう意味でも、公共交通に関してできることを考えていくのが、とても大切なのではないかと考えている。

- ・ もう一つだけお話ししたい。資料をみると今回の総合計画に当たっては市民の方の声をたくさん聞くということが書いてある。声を聞くだけでなく、声を出した人たちが少しでも良いので自分の声が届いたということが実感できると、行政と市民との信頼関係の増進に繋がる。
- ・ 別の地域で、なぜそんなにまちづくりに一生懸命なのかと聞いたら、「言ったことをきちんと叶えてくれるから」という話がとても印象的だった。
- ・ 声を聞いて、ちゃんと生かしてもらったなと感じてくれる市民が増える。そんな計画をつくり、実行していけたらとよいと思っている。

(委員)

- ・ まず1点目として、現状の課題の主たる要因は人口減少であるわけだが、県内の他自治体と比較しても酒田市は人口が非常に減っている。一方で、人口が増えている自治体がある。具体的には東根市だ。
- ・ そのため、東根市と酒田市とで、人口動態の比較分析をまずやっていただき、何がその要因になっているのかを正確に把握することが大事だと思う。
- ・ 自然増減、社会増減などいろいろな数字があると思うが、なぜ東根市では人口が増え、なぜ酒田市では減ったのか、はっきり要因を把握することが第一条件である。
- ・ 2点目は、10年後を考えると日泊道が開通するか、もしくは、開通のかかなり近くまで来るのではないかと予想している。
- ・ ということは、物流とか人の往来の関係で、酒田市に新たなチャンスが来る。そのチャンスを逃さないためにも今から準備する必要がある。
- ・ 環境が一変する中で、そのチャンスをつかめるのか、つかめないのか、これによって将来的に大きな差が出る。そのチャンスを逃さないためにも、ぜひ10年後を見込んだ具体的な政策を検討していただきたい。

(委員)

- ・ 10年後のありたい姿について、委員もおっしゃっていたが、農業の分野から見ると、高齢化が進んでおり、年々農業人口が減り続けていることを実感している。そのような流れの中にあっても、田畑をこれ以上荒らさず美しいままで10年後を迎えたい。
- ・ 今後の取組として、酒田市に優先してお願いしたいのは、国や県と連携した農産物の適正価格の維持、つまり、生産費として掛かった経費を踏まえた販売価格になるような働きかけをお願いしたい。
- ・ 持続可能な農業を実現するために、後継者に経営を引き継ぐにしても、しっかりと儲かることが大前提になる。
- ・ 親元就農の支援をしているが、今は孫に継承するケースも珍しくない。
- ・ 親戚縁者とか、嫁に行った妹の子どもとか、誰でも良いので取り込んで、何としてもこれ以上農業人口が減らないように、もしくは減ったとしても規模拡大で何とか現状維持の経営面積を維持できるようにしていきたい。

(委員)

- ・観光物産の振興は人口が減り、地域の経済が縮小する地方都市においては、観光交流人口を増やして外貨を稼ぐことが今後ますます重要になる。
- ・ただいま、約 30 年ぶりとなる観光物産振興体制の大改革を進めている。大きくは、物産振興部門と観光振興部門の分離をし、今後それぞれが成果を出していくことを目指している。
- ・第 1 弾として、観光物産協会から物産部門である酒田夢の倶楽を分離して株式会社化し、物産振興に特化した組織を 4 月 1 日からスタートしている。
- ・第 2 弾として、観光物産協会と酒田 DM0、これらを合併し、観光振興体制を一本化した。来年の 4 月 1 日スタートを目標に、全てのイベント運営の指揮命令系の一元化を目指し、合併協議を進めている。
- ・また、今酒田の観光を語る上で、その一丁目一番地にあたるのは山居倉庫である。
- ・この山居倉庫の利活用が本当に重要で、これから 5 年や 10 年かかるのでは全然間に合わない。急がなければならない。
- ・例えば、市長のトップダウンだとか、国会議員を巻き込み、文化庁への折衝をするだとか、そういったことが急務である。
- ・また、観光物産関係で一番困っているのが、地元の伝統工芸だとか、歴史あるお菓子屋さん、これらの廃業である。
- ・これらを何とか残すためにも、例えば大きな菓子工房を作って、そのお菓子を組織で守っていくだとか、伝統工芸を組織で守っていくだとか、そういった対応をしていかなければならない。
- ・加えて、私の会社で酒田市と一緒にやっている移住定住促進事業 TOCHITO だが、おかげさまで順調に進んでいる。引き続きこの事業を拡大し、レベルアップしていきたい。

(委員)

- ・世帯主の転勤で 2015 年に東京から移住した。気づいたらもう 12 年になる。
- ・首都圏にないもので酒田にあるもの、これを考えたときに「自然とか美味しいもの」だけでなく、「人との繋がり」と心の豊かさがある。
- ・この「人との繋がり」と心の豊かさは、首都圏では逆に必要ないものになる。人と人があまりにも近すぎて、人が多すぎて、トラブルばかり増えるので、隣に住んでいる人の名前を知らないほうが良い。首都圏はそういう状況になっている。
- ・私も長いこと首都圏で暮らしてきたわけだが、たまたま縁あって酒田に引っ越してきた。酒田には人が暮らしていく上で必要なものが揃っている。
- ・美味しい食べ物や水や空気はあれば当然うれしいが、その中でも最終的には人との繋がりがないと暮らしていけないということが分かった。
- ・だが、これは自分がある程度年を重ねたからわかったことであって、とても 20 代 30 代のキラキラしたものを求める頃にはわからなかったとも思う。

- ・また、人が移住を決断するとき、人との繋がりとか心の豊かさに加えて、安心して暮らせる基盤、これは決して福祉の充実のことを指しているのではなく、自立、つまりは暮らしていけるだけの仕事を持つことができるか、が大事な視点になってくる。
- ・酒田は「日本一女性が働きやすいまち」も目標としているが、私はサンロク IT 女子に所属しながら、今では個人事業主として自立している。心の豊かさは、心のゆとりを生み、そしてそれは仕事に繋がる。そのようにして初めていろんなことに気を配れるようになるのではないか。
- ・私が 10 年後に目指したいことは、デジタル技術を使える高齢者を増やすことだ。あと 10 数年経つと私も高齢者の域に入る。そうなっても、今と変わらずデジタル機器を使いこなしたいし、知り合いなどにも使い方を教えていきたい。
- ・また、ほどよいおせっかいがはびこるまちにしたいと考えている。
- ・人口が少ないからこそできることがある。首都圏は人が多い分トラブルも多い。反対に人口が少ないということは、そういったトラブルが比較的少なく、いろいろなことをスムーズに運ぶことができるのではないか。つまり、人口が少ないことを逆手に取って行政を運営していくことができるのではないかと考えている。
- ・委員がおっしゃっていた農業の人手不足にも関連するが、仕事を欲している人たちはたくさんいる。そのため、タイミーの酒田版みたいなものを作って、必要なときに必要なところに手伝いに行けるような仕組みづくりは考えられないか。
- ・また、仕事をする場所を探している人たちは私も含めて結構いる。有料でよいので仕事ができるような形でコミセンを開放できないか。
- ・コミセンを有料で仕事ができる場所、子どもが遊べる場所、高齢者の憩いの場所にして、いろいろな世代が交わることで新しい風を吹かせることができればよいと考えている。

(委員)

- ・初めに、自己紹介をさせていただく。私は長年高校で家庭科の教員をしてきた。
- ・家庭科という科目は 1994 年から、男女共修で学ぶ教科になったわけだが、生活についてあらゆる角度から現代の視点で子どもたちと学び、教えてきた教員である。
- ・計画をつくるうえで、市民に対してどう響いているのかというのが、私は重要であると考えている。
- ・これを踏まえ、いただいた資料を一通り拝見した。いろいろ取り組んでいるけれども、酒田市の課題は他の市町村と基本的には同じである。一方で、酒田で生きてよかった、生活してよかったと感じてもらうためには、共にやっているのだという意識が市民の中に生まれてくることが重要である。私としてはそれが足りないと思っている。
- ・さて、芸文協に関わっているのは、自分の生き様として、若いときから書道が続けてきたので芸文協の活動目的は、市民レベルでの芸術文化活動の推進にあるわけだが、当然、行政とも連携している。
- ・だが、ある時に市の対応に疑問が生まれた。その疑問に対して酒田市はきちんと答えなかった。これにはがっかりした。やはり、そこに対してもう少し答えられるようなあり

方を市には求めたい。

- ・ところで昨年度から芸術文化協会は一般社団法人になった。これに伴い、多くの酒田市の企業および個人の方から賛助会員になってもらい、経済的なレベルを高めようとしている。また、中身においては、今までと違って育成・交流に力を入れている。
- ・今日も私は、この会議の前にとある学童保育所に電話をした。芸文協の加盟団体が、ぜひ子どもたちに社交ダンスの楽しさを教えたい、ということを伝えた。
- ・また、今年は酒田市民芸術祭が70周年記念の年で、詩人である吉野弘の生誕100年である。その企画の一環で、酒田駅に依頼し改札を出て左側の部屋で、お盆の期間中に展示をさせてほしいと春先から伝えてきた。酒田駅からは、お金はいらないから来週から展示してほしいという返事をもらった。
- ・活動を通じて、このような市民レベルの文化活動を盛り上げていきたいなと考えている。ぜひ、酒田市には文化活動が生き生きとできるようなまちづくりをお願いしたい。

(委員)

- ・この4月から公益大は公立大学へ移行した。山形県、そして庄内の2市3町で構成されており、庄内広域行政組合、この2者が設立団体になっている。
- ・そのため、山形県および庄内地域の未来を担う人材の育成がこれまで以上に求められている状況だ。
- ・現在、全国的に18歳人口は減少している。そうした中で、国としては、大学の数が多すぎるというようなことも言っているので、今後新しく大学を作るとことは難しくなる。
- ・この地域に大学があることは非常に大きな強みである。この強みの活かし方を改めて考えている。
- ・これまでも学生たちは地域に出て様々な取組をしてきた。今回の審議会にも学生を代表して委員が参加しているが、このように様々な形で学生が地域に出て活躍し、この地域で何かできることがあるという実感を持つことが、今後、学生が地域に定着していくためのカギとなると考えている。
- ・当然、その後の就職先も必要になってくるので、学ぶことができる大学があり、やりたいことに挑戦することができる環境があり、それを受け入れられるような地域があり、そして、最終的には働きたい場所があることが重要である。
- ・こういった循環するシステムのようなものをうまく作り上げていくことが、大学として求められている。これまでの大学と地域との連携をさらに深めながら取り組んでいきたい。
- ・もう一点、私の専門である交通分野について申し上げる。先ほどの委員からも公共交通の話があったが、いろいろなデータを見る中で、酒田もだいぶ変わってきているなという実感がある。
- ・一方で、基本的な移動はほぼ自家用車であるという点については変わっていない。高齢化が進む中で、車の運転が心配だという方も増えてきている。アンケートをとってみる

と、70 歳以上の方のうち 1 割ぐらいの方は、本当は運転をしたくないが、移動手段もないので運転するしかない、という結果が出ている。

- ・そのような方のことを考えたときに、車以外の多様な移動の選択肢を増やしていくことが必要なかなと思っている。
- ・また、車を使った移動は、目的地にできる限り早く移動するという考え方が根底になる。高齢化が進んで成熟社会になってきている今、もっとスローで安全に移動することができる移動スタイル、生活スタイルが必要であると思っている。
- ・車がなくてもそれなりに楽しく暮らしていくことができるような、そんな 10 年後を描いていくことができればよいと考えている。

(会長：神田直弥委員（東北公益文科大学学長）)

- ・最後に市長からお話を頂戴したい。

(矢口市長)

〈市長説明資料に沿って説明〉

(会長：神田直弥委員（東北公益文科大学学長）)

- ・各委員からの意見に対し質問などはあるか。

(委員)

- ・先ほど言い忘れたが、若者も高齢者も困ったときに助けてと言える酒田であってほしい。そして、助けてと言われたら、良いよと言って助けてくれる人がいる地域であってほしい。
- ・その拠点になるのは、コミセン以外に例えば包括支援センターなどが考えられる。
- ・相談先としてどういうところがあるのかを地域の人たちは知っているのだろうか。コミセンの多機能化も地域の拠点として求められていく今後の姿なのかと思ったところだが、現状でそういった相談窓口は示されているのか。

(矢口市長)

- ・先日、民生委員児童委員の研修会があったが、そこで民生委員児童委員の会長が話していたことと重なる。
- ・民生委員は人と人とを繋ぐのが役割だと言われたが、その繋ぎ場所のリストがないので、それを自分で作った、と言っていた。

(阿部健康福祉部長)

- ・民生委員は、地域の身近な相談役として、高齢者を中心に見守り、状態を把握し、必要性があればどこかに繋ぐという役割を担っている。
- ・民生委員の方々が何か異変を感じたときに繋ぐ先としては行政もあるし、介護等の相談

であれば包括支援センターになる。

- ・また、障がいの相談であれば基幹相談支援センターがあるが、そういった情報をどのように皆さんにお知らせをするかということについては、課題があると考えている。それぞれの支援者はそれぞれどこに繋ぐべきかということはある程度理解しているが、それが明らかにわかるような形で示されているかということについては、反省すべきところがある。
- ・ガイドブックとか、ホームページとか、そういうものには掲載しているが、必要なときに繋ぎ先がどこにあるのかわからないという声がある。
- ・また、子どもの相談先としては子ども家庭センターとか様々な機関がある。それらは国、県、市の相談先が重層的に設けられている。様々なチャンネルで繋がるようにはしているが、支援者がそれを理解しているかについては疑問が残る。
- ・子どもがいる方は知っていると思うが、子どもには電話が配られている。また、メールやタブレット端末から相談できる仕組みが数年前から構築されている。それを教育相談員が確認し、本当にこれはまずいと判断した相談については、しかるべきところに繋いでもらっている。

(矢口市長)

- ・今説明のあった仕組み以外にも様々な相談先があり、そのリストは子どもにも配られている。

4 報告

〈事務局より資料4、5に沿って説明。質疑応答なし。〉

5 その他

6 閉会